

月曜日新聞

～昔の新聞から旧町時代を紐解く～



月曜日新聞創刊号の1面
(平成5年7月5日)

今から約30年前に旧早来町を拠点に発行していた月曜日新聞を皆さんはご存じでしょうか。旧早来町の一部の人が知る媒体だと思えます。まちの活動として、個人で新聞を発行し、情報を提供していた媒体というのをまずは知ってほしいと思います。知ることが、移住者の方たちが昔の人がどのようにしてまちを変えていこうと思ったのか、この特集を読んでいただくと歴史の一部がわかります。新聞を発行、新聞に携わった方々がどのような思いでこのまちに貢献しようと思ったのか、過去の出来事を知ってもらいたい、まちを変えていきたいという強い気持ちを持っている今の町民の方に向けて、この月曜日新聞から伝えたいと思いい特集を組みました。

◆新聞の構成について

月曜日新聞とは、バラエティ豊かな情報を満載した家族で楽しめる身近な手作り新聞です。発行部数300部、発行日は週の始め。1面にはニュース、2、3面は北と南のキャッチボール（まちと町外を結ぶ言葉のキャッチボール）という投稿欄、4面は谷村琢哉さん（自然塾、夢の丘プレイボール館、北海道ミュージックフェスティバルの立役者）の連載、5面、8面は他者の連載記事や写真家のフォトアルバムが載っています。

◆発行について

創刊号を出すために、第7号までは創刊準備号として発行してきました。第8号（平成5年7月5日）をもって創刊号としてスタートし、第64号（平成7年7月11日）が最終号で新聞発行を終了。

旧早来町安平から月曜日新聞を毎週1回きちんと発行することは大変なこと。しかし決めたことはきちんとやるこ

とが仕事というものです。「いま、ここを大切に！」、「人と人がどっかで重なり合う、それが人生じゃないですか！」、「男は度胸、半治は愛嬌」の3点をキャッチフレーズにして新聞を発行し続けた。

発行者について

桜木半治さん 熊本県出身

大学を卒業後、ちょうど20年間横浜市で小学校教師として働く。競馬に興味があり、教員時代に春・夏休みを利用して、北海道に足を運ぶことが多かった。鎌倉出身で作家の吉川良さん（芥川賞3度候補に上がるほど）という方の紹介があった、吉田牧場に行く機会があった。吉田牧場を頼りに馬の生産の現場を見ていくうちに、このまちに移住したいという思いが強くなり、平成5年に旧早来町へ移住。

発行者としての思い

札幌のある店を訪ねたときに『早来で新聞を発行している者ですけど、こんな新聞で

す』と言って店員に渡したことがありました。その店でアルバイトをしていた大学生にも新聞を渡してみたら、旧早来町には行ったことがないと言っていたので『ぜひ遊びにおいで、自然塾をやっている面白い人もいるよ』と勧誘した結果、その子が友達を連れてまちに来てくれて嬉しかったですね。

私の周りには、カメラマン、詩人、画家、小説家など良き仲間がいたので、一緒にやれば何かができると思って行動していました。自然塾の3人（谷村さん、日暮さん、大橋さん）に記事を書いてもらおう、私の横浜時代の詩人たちにも参加、購読者になってもらって発行していこうという思いが第一歩でした。そして、旧早来町の人の営み、今まで生きてきた経験を全部出し切る生き方、それが新聞発行の原動力になりましたね。

※特集記事の執筆については、発行者の確認のもと許可をいただいております。